

精神分析のはなし 第 11 話

JAM：精神分析のなかには新しいものが存在します。そして精神分析家たちがいつもそれに通じているわけではありません。分析家たちは、言わば精神分析について遅れをとっています。精神分析は諸効果を一精神分析家たちが意識していた以上に遠くまで及ぶ諸効果を一持っていたと考えなければなりません。

そして、実際のところ、無意識のなかに新しいものが存在するのだ、と、言うことはできません。というのも、無意識は古いものとあたらしいものとのあいだに差異を作らないからです。まさにその点に、精神分析が立脚するのです。それは、「無意識は時間を知らない」と、フロイトが言ったほどでした。

しかし、私たちが生きる今—21 世紀の初頭においては、20 世紀初頭の精神分析であったものと今の精神分析は、もはや同じではありません。もしフロイトの『夢の科学』（夢解釈）という偉大な書物の出版にさかのぼるなら、精神分析が誕生した 1900 年から 1901 年のそれと、今のそれとは違うのです。

それでは変わらないものは、何でしょうか。それは、「精神分析とは、背後に存在するものをひとが学ぶという意味において、真理のひとつの経験である」ということです。背後に存在するものとはつまり、ひとの感情、考え、不可能なこと、価値、理想のことです。ひとはそれらに近づく、いえ、たぶん近づくと思像して、もしこう言ってよければ、麻薬のない人生に近づこう、自分自身から毒を抜こうと、ひとは（分析を）やってみるのです。

あるいはさらに、ひとは劇のひとつの舞台上でその人生を生き、最後に舞台裏にまわります。一種の自由が与えられ、やっと少しの遊びを与えられて、ひとは目が覚める感覚をもちます。もっともそれは分析のなかにおいては一度だけというわけではありませんが。

ただし変わるもの、それは以下のようなことです。精神分析の初期、精神分析家たち、フロイト自身も、当時発見した真理とは、規範に合流するものである、とりわけ、当時支配的だった概念に合うような、性生活の規範に合流するものと考えていました。

主体は性生活において無能であるとか固着していると感じており、愛し享樂することに対しても自分には条件が課されている、さらに主体には規範との関連でいくらかの逸脱が認められるに違いない、しかし真理の経験としての精神分析は、主体の性生活を「まっすぐに」立

て直してくれるに違いないと、考えていたのです。

そして、分析を経験すると、ひとは実際に一般的には、精神分析が効果をたしかにもたらし
のが分かります。しかし今問題になっている「まっすぐに」というのは、各自にとり個別的
なものです。つまりあなたの享楽についての真理は、規範に一致するものでは必ずしもまっ
たくありません。そして一般的には、精神分析は規範を問いに付すものなのです。

そして、精神分析家たちはそこで驚愕した最初の者たちであったと、言わなければなりませ
ん。彼らはまったく、その経験が示していたことに意見が一致していなかったのです。そし
て症状と呼ばれるものの、ある種の相対性を理解する必要があるのは、まさにこの点におい
てなのです。

私たちは「症状がある」と言いますが、それはなにかうまく行っていないものがある時です
よね。しかし、それはまあ、ひとが漠然と頭のなかにもっている理想との関係で、そう言っ
ているにすぎません。理想との関係で考えるのをやめるなら、それは機能不全であり、それ
はひとつの働き具合です。つまり、たんに、「それはこう動く」と言っているだけです。

他方、理想とは、変化するものです。精神分析は、セクシャリティーに関してまさに理想が
変化するように、多くのことをやってのけました。前世紀の終わり頃、誕生が見えたもの、
つまりフェミニズム運動、同性愛運動というものについて、精神分析の諸効果のうちに数え
なければなりません。それらは翻って、精神分析自体と社会に今度は諸効果をもたらしたの
でした。

分析家たちは気が付いたにちがいないですし、概念化しなければならなかったことがあります。
それは「ふたつの性のあいだに、本性としてプログラムされた関係というものは存在し
ない」ということです。社会のなかでプログラムされた関係は存在しますが、こう言ってよ
ければ、それらふたつのプログラムは、同じではありません。ですから前世紀のはじめ、こ
のパンドラの箱を開けたのが精神分析でした。当時はまだ、同性愛は暴露の禁止のもと、あ
る種秘密と隣り合わせの状態に置かれていたのです。

たとえばプルーストの作品に、同性愛者は登場します。それは陰謀や秘密結社のように称揚
されています。そして精神分析は同性愛についてあの効果—すべてのものにたいしても効果

を一をもたらししました。同性愛は分析経験のなかに入りました。言い換えるなら、その効果とは告白と同時に赦免でした。たいへん胸をうつのは、精神分析家たち自身が考えたことからは無関係なことで、赦免が存在したことです。

分析経験においては、話すことについて許可が与えられています。あなたが望むことを話そう、招待されてさえいます。あなたはぼんやりとはできないでしょう。あなたの言うことは聞かれていて、言ってみれば、切迫した仕方で赦免が存在し、赦免は分析家の偏見よりも強く発揮されるのです。

もちろん、分析家というのは・・・、今日もまだそういう分析家がいると思いますが、家父長制につながっていて、いわゆる反動的なひとたち、マッチョ・・・、そうですね、ひとが望むものすべてが当てはまる人たちだったことでしょう。しかしその人たちはある実践に仕える分析家であり、その実践自体が、ある赦免を含むものだったのです。

そして今から考えると、精神分析はひとつの矛盾をふくんでいるものですね。それは、実践と社会規範のあいだで、精神分析というものを動かす矛盾です。

分析の臨床は、実際、長い間、規範の概念が必要であり、それを用いてきました。つまり、分析家は分析治療において生じる現象を、成熟、統合、規範的な進歩、正常な発達の理想、というものに基づいて評定していました。まさにそれらによって、中止や抵抗、性的な逸脱といったものを判断していたのです。

しかし徐々に、分析家たちは「単極的臨床」と呼びうるものから、「多極的臨床」へと移行することを余儀なくされたのです。もちろん、ひとは分析における進歩を語ります。しかしそれはその種のスタンダードな進歩であるようなものに、主体を適合させるよう導くためではありません。それは、こう言ってよければ、民営化した進歩、です。

それこそまさに、分析家のポジションを完全に変えたものと言えるでしょう。ここ 30 年か 40 年のあいだ、ひとは患者と患者自身、自らの真の存在との一致点を探しています。社会的に方向性のある種見失った感を与えるほどに、規範自体、かなりの進歩を遂げたと告白しなければならぬのですが、各自は、均衡の点、自分自身との一致を、見つけられるとみなされています。

おそらくまさにその点について、ラカンのあの機知を導入できるに違いありません。かつてひとが使っていた「倒錯」というカテゴリーが、精神分析において時代遅れのものとなったことについて、ラカンはとりわけその変貌をしかと認めた最初のひとでした。

ラカンの機知は、倒錯 *perversion* を、*père-versiton*（父—バージョン）と書くことにあり

ました。

それでは、この機知はなにを意味するのでしょうか。どんな影響を生むのでしょうか。

そうですね。それはまあひとつの愚弄です。その時まで精神分析の軸だったもの、エディプスとよばれるものへの参照、「父の名」になされた参照への、愚弄ですね。「父の名」とは、母が子供たちにパロールの尊重を伝達する、ひとつの家族の軸として課されるものです。それこそまさに、話存在のウェルビーイングにとって、いまなお要求される布置というものでしょう。

「père-versiton」と言うことは、そのエディプスが、他のものと並ぶうちの、社会的な一形式であると、考えられます。（他方、）古典的なエディプスとは倒錯とは対置されていました。倒錯者は規範には近づかなかったであろう者、と、されていたのです。

とどのつまり、分析の視点からは、エディプス自体は他のものと並べられたうちの、ひとつの「père-versiton」にすぎず、ひとりの女性にかかわりをもつ者としての父親のほうを向いたということではありません。しかもしばしばその荷の重さを嘆くことになるのです。

結局それは理想ではありません。つまりじつは・・・あまりにも長い間、理想はそのものとして保たれたのですが。こう言ってよければ、父の名の特権は終わりです。ひとはしばしば、ラカンが「父の名」の宣教師なのだ、と、考えたものですが、彼はそこから機能を取りだしました。それもまさに複数へと（諸名へと）前進するためでした。

父の諸名というものが存在します。そして父の名とは・・・そのように機能するものすべて、つまり秩序だてるもの、それほど道に迷わずにあなたの人生が送れるようになることを可能にするもの、それは、父の名ではありませんし、法でもありません。それはひとつの役に立つ道具にすぎません。

言い換えると、21 世紀の初頭、精神分析は決定的に、教条的な時代からプラグマティックな時代へと移ったのです。一般的に言えば、同性愛の主体が分析にやってくる時、それは同性愛を放棄するためではありません。それはまず同性愛のことを話すためです。そしていまだにそれは、ときおり、非常に難しく、辛いことなのです。理想というものがそこで障害となる場合は、そうなのです。

このケースで分析家は、主体を苦しめる理想を和らげることにだけ、狙いをさだめます。そうすることで、できれば、主体がその享楽のモードとより快適な関係を結ぶことができるようにするのです。したがって、同性愛を治すという問題設定は、まったくそのものとして時代遅れなのです。精神分析は変化したし、自分たちの患者たちによって変化してきたのです。

同性愛もまた、変化しました。

今日、以前にはいなかった新しい人が存在します。それは精神分析にじつは由来するもので、ゲイのことで、それは新しい主の語です。じつは、同性愛、マイノリティーとしての同性愛者の新たな社会的表象（現れ）であり、権利を、ほかの人たちと同等の権利を要求しています。実際に、こうして、平等の要求は享樂の次元にまで及び、支配的イデオロギーにその原則との矛盾を生んでいます。享樂は今日、政治の問題となったのです。

それからほかの同性愛の人たちもいます。ほかの人たちのように存在することをまったく望まない人たちです。違反として存在することを望む人です。この人たちにとっては、享樂は普遍化の要求に対して反逆することによって、それは非合法（地下の存在）的で隠蔽的なある種の形式のなかに存在しています。それが彼らの享樂に固有な条件となっています。私はゲイの人たち自身のために、それも尊重すべきであると思っています。